

背中を押して

私はいつもよりも少し早く家を出て、人通りの疎らな通学路を緊張した面持ちで迎っていた。

今日は私にとっての特別な日だ。

世間一般では二月十四日、俗にバレンタインデーと呼ばれている。

女の子が意中の男の子に対して、思い思いに装飾したチョコレートに乗せて自分の気持ちを伝える……そんなイベントがいつ頃から始まったのかは分からないが、一説にはお菓子業界の広告戦略の一環だったという。

そして、バレンタインデーという一年で特別の一日は、少なくともこの日本においては年中行事の一つとしてすっかり定着している。

私も、今日のバレンタインデーに特別の思いをかけて臨む、どこにでもいる平凡な中学生の一人だ。

この前の休日には、わざわざこの日の為に、美味しいチョコレートでちょっと有名なお菓子屋さんの、特別限定品のバレンタインチョコレートを購入してきたのだ。

それから、恋愛成就にご利益があるといわれる神社にお参りもしてきた。

今日こそは絶対に……そう覚悟を決めて、着々と準備を進めてきたのだ。

その結果も、あとほんの少しで出てしまう。

昨日までは『今年こそ』『明日こそ』と大いに意気込んでいた筈なのに、いざ運命の当日を迎えてしまうと、望ましくない結果がでるのでは……と気を揉んでしまっ、どうしても弱気の虫が先に立ってしまう。

でも、例えどの様な事情があっても、今日ばかりは一步も後に引く訳には行かないし、その為にこそ色々事前の準備もして、正に背水の陣で臨んでいるのだ。

授業が始まるまでには、まだかなり待たされなくてはならない時間ではあるが、やはり私と同じ様に、どことなく緊張した面持ちの女子がちらほらと校門を潜ってゆく。

多分、目的は私と同じなのだろう。

私はそわそわと周囲を気にしながら昇降口へと向かい、私のいつも使用している下駄箱とは別の一角へとつま先を向ける。

そこには、彼の使用している下駄箱がある筈だ。

この日の為に、例えどの様なシチュエーションになっても、必ず彼にチョコレートを渡して自分の思いを伝えられるように、何度も頭の中でシミュレーションを繰り返して、その為の下調べもしてある。

でも、頭の中で考えるのと実際の行動とでは、やはり天と地ほどの違いがあって、たかが彼の下駄箱へ向かうだけでも、体が強張って膝がガタガタ震えてしまう。

——今日を逃したらチャンスはないのだから、しっかりして！

思い通りに動いてくれない自分の体に叱咤しつつ、私は恐る恐る、彼の下駄箱がある一角を覗き込んだ。

——ダメだ。

今、ちょうど先客が彼の下駄箱の真ん前に立っていて、靴の中に手を入れている所だった。

私は、もうその場所に一瞬でも留まっていられなくて、そのまま先客の女子に気付かれない様に、そそくさと次のポイントへ向かった。

幾ら今日が特別の日とはいっても、同じ意中の相手に思いを伝えようとする者同士が、よりによって決定的な現場で面と向かってしまうのでは、お互いに気まずい思いをするだけだし、何となく恥ずかしさも込み上げて来てしまう。

それに、よくよく考えてみれば、バレンタインチョコレートは食べ物なのだ。

例え綺麗に包装してあっても、食べる物を下駄箱に置いておくというのも、特に潔癖な人にとっては余り気分が良くないだろう。

ましてや、その相手が自分にとって特別の人であればなおさらである。

——結局、下駄箱では思い止まって正解だったのかな。

自分の意気地のなさを認められないばかりに、それらしく誤魔化せそうな尤もらしい理由をくっつけて納得すると、私は気分を入れ替えて再度密かに気合を入れた。

次のポイントは、彼の教室だ。

彼がまだ登校していない時間に訪れて、こっそり彼の机にチョコレートを忍び込ませる。いわゆる定番の方法ではあるが、彼に直接手渡すのでなければ、この方法くらいしかないだろう。

いや、彼の自宅のポストにでも直接入れておくとか、誰か友人を介して渡してもらう方法もある。

でも、彼の自宅の場所なんて知らなかったし、ましてや友人に頼むなんてもっての外だ。

もし私が男の子から告白されるとしても、その子の友人から『あいつ、お前の事が好きだって言ってるから、付き合ってやれよ』とかいわれても、本当なのかどうか疑ってしまうだろうし、その男の子に対して余り良い印象を持たないだろう。

幾ら恥ずかしくたって、照れくさくたって、やっぱり告白は友人に頼んでよい問題ではないと思う。

彼のクラスの教室は、私のクラスよりも上の階にあって、普段は殆ど訪れる機会もないから、先ほどの昇降口なんて問題にならないくらいに緊張する。

幸いにも、今は朝の早い時間だからなのか、廊下を歩いている人も疎らだったが、これが授業の合間の時間だったら、きっと衆目の関心を一身に集めてしまっていて、とてもじゃないけれどもミッションの実行は不可能に違いない。

——とってもしっかり緊張するけど、早く彼の机にチョコレートを置いてこよう。

私は教室の戸口で一旦止まって、大きく一つ深呼吸をすると、そのまま早足で教室の中へ入り込んだ。

——彼の机は、窓際に近い、あそこ。

その程度の情報は、既に予めリサーチしてある。

どの机も規格品の、一見同じ机にしか見えないが、私にとっては、彼の机だけがどことなく薄ぼんやりとした白いオーラを被っている様に見える。

もちろん、単なる思い過ごしに過ぎないのだが。

そして、プルプルと小刻みに震える覚束ない手つきで、鞆の中から綺麗に包装された一包みの箱を取り出した。

空いている方の手で、机にきっちり収納されている椅子を半分ほど引き出し、そのまま机の傍らに膝を折って、机の引き出しの中へ視線を向けた。

——あ、やっぱり……。

やはり定番の方法だけあって、彼の机の中には既に数包みの可愛らしく包装された箱が、所狭しと詰め込まれている。

私の用意した包みを強引に押し込めない事もないだろうが、私にとっては彼に対する特別な思いを込めた贈り物なのだ。

それを、私と同じ思いを抱く、いわばライバルの贈り物と同じ場所に、それらの中に紛れ込ませておくだけでは、私の特別な思いは彼には届くまい。

先ほどの下駄箱に置いていた人達や、この机の中に贈り物を置いておく人達と、私の彼に対する特別な思いは全く別物なのだ……と、彼に気付いてもらわなくてはならない。

でも、机の中にこっそり忍ばせていても、きっと彼にその思いは通じないだろう。

しかし、それ以外で私に残された方法は、彼に直接手渡しするしかなくなってしまふ。

彼に直接手渡しなんて……私にとってはとても恥ずかし過ぎて、そんなに大胆な真似は出来そうにない。

こうして、特別な思いを寄せる相手のいる女の子にとっては特別の日に、特別製の贈り物に私の特別な思いを乗せて伝えるだけでも、私にとっては決死の冒険行だというのに。

——ああ、こんな風に思い悩んでいるうちにも時間が経ってしまう……一体どうすればいいんだろう？

「おはよっす……って、お前誰だっけ？」

突如、背後から聞き覚えのない男子の声を受けて、私は思わず息を詰まらせて振り返った。

見覚えのない人だけど、きっとこのクラスの生徒なのだろう。

「な、何でもないです。失礼しました」

突然の不意打ちに混乱してしまつて、私は自分でも訳の分からない言い訳がましい言葉を吐き出すと、そのまま顔を伏せてそそくさと教室を後にした。

ああ、全然知らない人だけど、とんでもない所を見られてしまった。

あの場の状況から考えると、きっとあの男子は彼のクラスメイトなのだと思う。

ほんの一瞬の出来事ではあったけれども、もしかしたら、私の心に秘めた思いをあの男子に見透かされてしまったのかもしれない。

そして、私の知らないうちに彼の耳にその事件が伝わっていたりしたら……ああ、どうしたらいいんだろう。

とにかく、彼のクラスにはもう二度と行けない。

どうしよう。

一体、どうやって彼に贈り物を渡せばいいのだろうか。

思いがけぬ衝撃にすっかり心を揺さぶられた為に、朝のうちに決行する事をあっさり諦め、肩を落として足取りも重く自分のクラスへと向かう私の心の中には、早くも先ほどまでの自分の判断と行動の失敗に対する後悔と、益々見通しが厳しくなる今後へ向けての得体の知れぬ不安に苛まれていた。

*

「楓（かえで）、今日は全然元気ないじゃない。どうしたの？」

「う、うん……」

クラスメイトでもあり、一番の友達でもある若葉（わかば）ちゃんが、普段にも増して落ち込んでいる私を心配してくれている様だけれども、今の私は今朝の致命的な失敗からまだ回復していなくて、若葉ちゃんの話相手をする心の余裕も取れないのだ。

「ふーん。まさかとは思うけど、まだ楓の王子様にチョコレートを渡していないとか？」

「えっ、どうして？」

「楓は思ってる事が顔に出るタイプだから、すぐに分かっちゃうよ。でも、望月センパイって結構人気あるから、早くしないと手遅れになっても知らないよ」

「そんな、脅かさないでよ。私はとっても真剣なんだから……」

そう、私の意中の人、心の王子様である望月センパイは、校内の女子には結構人気があるのだ。

だからこそ、私が朝早くに学校へ来た時点でも、既に幾つものチョコレートがセンパイ宛に送られていた。

確かに、センパイは見た目もカッコよくて、勉強もスポーツも得意だし、生徒会活動にも積極的に関わるようなリーダーシップもあるし、正義感も強いし、後輩に対する面倒見もいい。

一般的に見て、多分もてるタイプなのだろうと思う。

でも、私の場合は、センパイに対するそんな一般的な評価とは関係無しに、もう一年以上もセンパイを思い続けている。

きっかけは、まだ私が中学生になり立てで、中学校の右も左もわからない頃に、慌てて走っていて転びそうになった所を、センパイに助けてもらったのだ。

助けてもらったといっても、私が勝手につんのめって、センパイに向かって突っ込んでいってしまっただけだ。

普通なら怒られたり、文句を言われても仕方のない所だけど、センパイはコケそうになった私を両腕でしっかり受け止めてくれて、『大丈夫？』と優しく微笑みかけてくれた。

私はその時に、センパイに一目惚れしてしまったのだ。

でも、昔から内気で恥ずかしがり屋だった私は、センパイに私の気持ちを告白するなんて、考えただけでも死んでしまいそうなくらいに恥ずかしくて、とても出来る訳がないと思っていた。

それに、別にセンパイに思いを伝えられなくても、ただ遠くからこっそりとセンパイの姿を垣間見ているだけで、私は満足だった。

もし、これからもずっと、遠くからこっそりとセンパイを眺め続けていられるなら、私はこんな一大決心をしていないと思う。

でも、センパイは三年生で、もうすぐ学校を卒業してしまう。

私にとって、センパイとの出会いは突然過ぎて劇的だったけれども、センパイはきっと私の事なんてこれっぽっちも覚えていないだろう。

だから、私がずっとセンパイだけを強く思い続けているのに、センパイは私の存在など知らずに卒業してゆく……それでは、一年以上に渡る私のセンパイへの思いが余りに虚しくなってしまうから、せめて、『ずっと好きでした』って伝えられたら……そう思ったのだ。

そして、心が痛くなるくらいに切ない私の思いを、若葉ちゃんだけは知っている。

「あんまり深く考えなくても、センパイに直接『好きです！』って渡してくれば良いのに。そういう事って、その場の勢いが大切だから、悩んだり迷っていると益々尻込みしちゃうよ」

そんな事は、今更若葉ちゃんにいわれなくてもわかっているつもりだ。

分かっているにしても、人間には誰しも得手不得手があるのだから、苦手な事を勢いでサクサクこなせる筈もない。

「そんな事言われたって、私は若葉ちゃんみたいに積極的じゃないから。それよりも、若葉ちゃんは今年のバレンタインはもう渡したの？」

「私？ 今年はね、本命はナシかな。でも、物欲しげにしてる男子に義理でお恵みしてあげただけ」

「そっか。私はセンパイの事だけで精一杯で、義理でお恵みなんて思いつかなかった」

「まあ、確かに楓がセンパイに思いを伝える気になっただけでも、楓にとっては大事件だからね。せっかくチョコレートだって用意したんだから、後悔しないように頑張りなよ」

「うん、ありがと」

「でもさ、別に今日チョコレートを渡せなかったとしても、卒業式までにはまだ日があるから、余り深刻に悩まなくても良いと思うよ」

若葉ちゃんはそういうけれども、それは若葉ちゃんだから言えるのだと思う。

バレンタインデーの様な、女の子から男の子へ愛の告白をする特別の日でもないのに、私がセンパイに自分の思いを伝えるなんて、絶対に無理だ。

今日は特別の日だからこそ、まだしも頑張っって自分の思いを伝えようと決断出来たのだから。

——やっぱり、今日中には絶対に渡さないよ。

そう、私にとっては、今日一日しかチャンスが残されていないのだ。

何でも無い普通の日に、チョコレートの様な特別の意味を込めた贈り物もなしに、自分の言葉で思いを伝えるなんて、私には絶対に不可能だ。

だからこそ、バレンタインデーの魔法が効力を発揮している今日中に、何としてでもセンパイに告白しなくては……。

結局、放課後になるまでセンパイと二人きりになるチャンスも訪れずに、かといってセンパイをひと目のないどこかへ呼び出す勇気も、ましてや公衆の好奇の視線に晒される中をセンパイのクラスへ乗り込んで直接手渡しする根性もないまま、無駄に時間を過ごしてしまった。

これが私に残された最後のチャンスと心に決めて、放課後になるとすぐに校門の脇に移動して、センパイが通りかかるのを待ち続けた。

センパイはもうすぐ帰ってしまうのだから、今更機の中に忍ばせてもタイムオーバーだし、やっぱり食べ物を下駄箱に託すのはNG、そうすると、残された選択肢は『帰りかけのセンパイに直接手渡し』しかないのだ。

ああ、どうしよう。

センパイに直接手渡ししなくてはいけないなんて。

でも、帰りかけにちょこっと渡すだけだったら、何とか頑張れるかもしれない。

たった一言、『受け取ってください！』とだけいえれば、それで良いのだから。

でも、緊張の余り舌が引きつっちゃって、まともに喋れないかもしれない。

よりによってセンパイの目の前でどもっちゃったりしたら、変な奴と思われて嫌われるだろうか？

嫌われたり気持ち悪がられるくらいなら、このまま黙って諦めた方が良いかしら？

否、そんなにすぐに諦めてしまえる曖昧な気持ちならば、そもそも告白しようとも思っていない筈。

一年以上に渡る私の強い思いは、そんなにいい加減なモノじゃない。

こうして校門の脇でセンパイの帰りを待ち侘びているだけで、心臓はバクバク波打っているし、頭の中はカーッと熱くなって爆発しちやいそうだし、足元はガクガク震えているし、こんな事じゃとてもセンパイに私の思いを伝えるなんて出来そうにない。

ああ、この前お参りした神社の神様、私がちゃんとセンパイに自分の思いを伝えられる様に、力を貸して下さい。

何だか病気に罹ってしまったみたいという事を聞かない私の体を、何とか落ち着かせて下さい。

ちゃんとセンパイの目の前でも、自分の気持ちをはっきりと伝えられるだけの勇気を下さい。

どうしようもなく臆病な私の背中を押して下さい。

どうか……。

この際頼れる物には何にでも縋って、これまでの人生で始めてであり最大の勝負を無事

に切り抜けたかった。

何だかとても息苦しくて、このまま倒れてしまいそう。

ああ、センパイ、早く出て来て下さい。

*

「あの……」

どのくらい時間が経ただろう。

何時間もその場に佇んだまま、じっとセンパイの通り掛かるのを待っていたような気もするし、ほんの瞬きする間に待望の瞬間が訪れた気もする。

これまでの一年以上に渡って、離れた場所からだったけれどずっと静かに見守ってきたセンパイの横顔を、絶対に見誤る筈はない。

でも、私はセンパイの横顔に向けて言い出しかけた言葉を慌てて飲み込んだ。

センパイの隣に、見覚えのある男子が並んで歩いていた。

今朝、センパイの教室を訪れた時に、いきなり背後から声をかけてきた男子だ。

ああ、どうしてよりによってこの人が一緒にいるの。

私は、最後のチャンスが呆気なくも不意に終わりを告げた事を悟り、目の前が真っ暗になった。

きっと、この人はセンパイのクラスメイト……と言うばかりでなく、とても親しいお友達なのだろう。

何事かを話しながら、二人とも笑顔で私の目の前を通り抜けた様子を見れば、ほぼ間違いはない。

私は、見ず知らずのセンパイのお友達にまで、これまでひた隠しにしてきた私の思いを知られてしまった。

最早センパイに手渡しするしか方法がない以上、センパイに面と向かう恥ずかしさは我慢するしかなかったが、私の決定的な場面を目撃されてしまった人に、もう一度センパイに思いを伝える場面を見られてしまうなんて、私には耐えられない。

余りに恥ずかし過ぎて……。

いつの間にか、私の心の中を駆け上がる様々な思いが涙の奔流となって、静かに頬を伝っていた。

私の儚い恋は終わった。

センパイに拒否された訳じゃなくて、それどころか自分の思いを伝える所までも届いていなかったのだが、私の恋は唐突に終わりを告げた。

私が中学生になってからの殆どの時間は、常にセンパイと共にあった。

でも、センパイは私のそんな思いを露ほども知ることなく、もうすぐ私の目の前から姿を消してしまう。

そして、きっともう二度と再び、センパイの姿を眺める機会もなくなってしまう。

私が今までセンパイと共に過ごしてきた時間は、一体何だったのだろうか。

こんなに身を引き干切られる思いをする位なら、いっそセンパイとは巡り会わなかった方が遥かにマシだったろう。

否、そんな事はない。

センパイと巡り会えたおかげで、私の中学校生活は華やかな彩りに満ちていた。

毎日が楽しかった。

直接面と向かったり、言葉を交わしたりは出来なかったけれども、毎日センパイの姿を遠くから眺めているだけで、ホンワカと心が温かくなった。

幸せな日々だった。

その思いは、センパイが私に贈ってくれた何よりも大切なプレゼントだ。

でも、そんな至上の幸福に満ち溢れた夢の様な日々も今日で終わり、これから卒業式までの間はセンパイと引き剥がされる事になる恐怖と不安に打ち震え、センパイが卒業してしまった後は、きっと私は灰色の抜け殻と化してしまうのだろう。

本当は、もっと幾らでもやり様があったのに、全て私が臆病だった為に、最も最悪の結論を導いてしまった。

なんてドジなんだろう。

今日だって、センパイに贈り物を渡して、それと一緒に私の思いを伝えるチャンスは幾らでも残されていた筈。

そして、もしかしたらセンパイも私の思いを受け止めてくれて……なんて都合のいい奇跡は起きる筈がないけれども、少なくとも袖原（ゆずはら）楓という一人の女の子が、一年以上もの間に渡って望月センパイにずっと特別な思いをかけてきました……その事実だけはセンパイの記憶にはっきりと刻まれていた筈。

そして、時々で構わないから、『中学生の時に楓と言う女の子に告白されたな……』と思い出してもらえれば、私はそれで満足だった。

私の記憶と、センパイの記憶の中で、私が全力でセンパイに傾けた思いは永遠に生き続けるのだから。

でも、たったそれだけの儚い望みでさえ、私にとっては永遠に叶えられない届かぬ夢へと変わってしまった。

センパイへの思いと共に過ごした一年以上の時は、薄汚い灰色に汚れた土埃に覆い尽くされて、二度と振り返られもせず、かつてそこにあった事さえも忘れられたまま次第に朽ち果ててゆくだけの、無意味な瓦礫の山へと化した。

私は、今まで何をやってたんだろう。

こうなってしまう前に、幾らでもやりようはあった筈なのに、全て私が選択したのだ。

全てが私の責任。

いつの間にか、私は町の中をあてもなく走っていた。

幾ら抑えようと思っても、瞼の奥から涙の滴が無尽蔵に這い上がってくるし、せめて私を知っている人にだけはこんな姿を見られたくはなかった。

今、この場所からは一刻も早く逃れたかった。

目的もなく、どこへ向かっているのかも気にせず、ただ、自分の足が赴くままに走っていた。

しばらくの間闇雲に走り続けて、さすがに疲れて息が上がってきたら、今度はそろそろと歩き始めていた。

でも、今の自分の意識の中からは、『今どこにいるのだろうか?』とか、『これからどこへ向かうのだろうか?』といった些細な問題は完全に締め出されていた。

今の私にとっては、まだ自分の思いをセンパイに伝えてもいないのに、否、伝える事も許されないまま失恋してしまった……という残酷な結末をどの様に受け止めたらよいのか、そちらの方が遥かな重大事である。

だから、少し俯きがちなながらも前方の視界に捉えている光景に対しても、私の頭の中ではまるで認識されていなかった。

センパイに私の思いを知ってもらおう無数のチャンスを逃してしまった……その強烈な後悔の念だけが、私の脳裏をグルグルと渦巻いていた。

端から見れば、朦朧とした意識のまま所在無くとぼとぼと歩いていたであろう私は、いつの間にか見知らぬ住宅街のそれ程広くはない路地に紛れ込んでいた。

でも、今の私にとっては、自分がどこにしようとか関心はない。

むしろ、このままどこかへ消え去ってしまっても構わないと、心のどこかで密かに願っていたのかもしれない。

そんな私の目の前に小さな十字路が見えてきた時、ふと私のつま先を硬い衝撃が跳ね返し、そのまま体のバランスを崩して前のめりに十字路へ向かって頭から突っ込んでいった。

顔から硬いアスファルトに激突する——眼前に迫った地面に向かって腕を伸ばすより先に瞼を閉じた私の体は、予想に反して宙に浮いたまま留まっていた。

——えっ、どうして?

私は思わず顔を上げると、そこには見覚えのある顔があった。

彼——望月センパイだった。

私は、彼に上半身を抱え込まれる様な形で、バランスを崩して倒れ掛かった体を支えられていた。

「大丈夫?」

彼は言ってくれた。

私が彼と初めて出会った時、一瞬にして恋してしまった時と同じく、ちょっと気遣わしげな微笑を浮かべて。

彼の力強い腕に支えられているのは心地よかったけれども、同時に恥ずかしさも急速に込み上げて来て、頭の中がカッと熱くなって真っ白になってしまった。

「ごめんなさい」

私にとってもいきなり訪れた予期せぬ偶然に、どう対処してよいやら分からずに慌てふためいていた。

「よそ見していると危ないよ」

彼は言う、そのまま私の目の前をすり抜けてゆく。

「あの……」

心臓の鼓動が耳元にまで響いてきて、頭の中も真っ白になって、全身がカタカタと細かく身震いしてきて、緊張の極地に達している中、私の朦朧とした意識の中で、自分の意思とは関わりなしに勝手に彼を呼び止めていた。

まるで未知の何者かに自分の体に乗っ取られてしまった様な、不思議な感覚だった。

「あの、これを受け取って下さい」

私の声に振り返ったセンパイの目の前に、綺麗に包装した小さな箱が差し出されていた。

(了)

HP 【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007 【Blankfolder】 こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。